"帝国主義軍隊"の中から

隊友反戦討論会

FEDCBA

元陸上自衛隊教育生
元航空自衛隊空士長
元海上自衛隊海士長
元航空自衛隊一等空士
元海上自衛隊一等海士
元陸上自衛隊三等陸曹

第二回　自衛隊の実態

六六年の階級闘争が四・二八から恒期安保決戦へのぼりつめる過程で遭遇した課題は、"権力問題"であった。一切の運動が七〇年代の激動を問い、その根拠性と具体性が問われ、各々の対象的領域に対して実践的解決能力の開示が迫られている。その事は来たる「革命の現実性」を我が物とし得た日本階級闘争の課かい地平でもあるのだ。

こうした中で、公然と隊内反乱の口火を切った小西三曹と、隊友反戦の活動は、自衛隊の実体解剖―帝国主義軍隊解体―大人民総武装を指向するものとして、「権力問題」への（全面的に考え切れるかは、階級形成なと一別問題としても）風穴を穿ったと言えるだろう。

京都隊友反戦との討論の中で、自衛隊の実体解明からその解体の方向性を模索しようとするこの企画は、第一回、入隊―脱隊をうけて、今回は自衛隊の実態、隊員生活を明らかにする中で、反軍闘争に具体的に結びかけていこうとする場合の手掛かりを見出していく。

（編集部）

司会　今、二人二人の歴史を客観的に見ると、家庭の人間のほうがより深く入隊の動機やそれに作用した社会的要因をさぐる上で、生活を通し隊員としての過程を明らかにしてもらいたいのですが、すでにその討論のなかでできている自衛隊の実態を討論の中で、更に鮮明にしていきたいと思います。

C　僕は海上自衛隊で護衛艦に乗っていたのですが、中はすごく平和で、朝は夏六時、冬六時半起床で、飯食うことと寝たれることしかしゃべらない。一番楽なんはランプで艦長をはじめとして大〇%位の人間がやっていたらめめる間がとんでんだのじゃないかと思っぽいます。

D　船の場合は比較的狭いでしょう。僕らの航空自衛隊の場合だと一つの基地に三千人がいてそのいろんな部隊が混在しているから、一番楽なのは部隊から離隊にして分離されていたけで、航空関係の仕事としてのことがあるから、教育隊から整備部隊から航空機整備部隊からいろいろ分れていて、僕は共〇人程度の管制にいたんですが、自分の部隊以外はほとんど知らないのが実状です。

司会　今、演習の訓練のことを少し話してもらったんですけれど、その時「敵」がいるという仮想を設定して訓練をやっていると思うけれど、それをどういう風に受けとめているのか。

F　僕らは、「敵」というのは自衛隊に敵意をもっているでしょう。そいつらが敵なんであってね。敵といったら、ソビリアン、シビリアン、ロシア、北朝鮮と北朝鮮とかいろいろ思っているんだ。

D　航空の場合は戦争がはじまるまでで、戦争がはじまったら中立はない。なぜかというと、戦争がはじまるとレーダーサイトが彼奴にねらわれるからで、上官でさえそう言っているんですよ。

F　僕ら陸上は航空の補助と一緒に演習をやるけど、例えば俺らのところへ一応約三万位から落下傘降下する。砂けむりがあがる。俺ら陸地には一人の人間がいるんだ。そうすると前線司令部から「今、援護射撃と入国の第二航空団が行った」と報告がくるやつ。でもわれわれは全然援護がこない。美前の話せないから。それで前線司令部にいちいち連絡して、そこから又イロットへ連絡が行って、見えてたらどんどんやっちゃいますけど、見えないところを攻撃しているが、航空は攻撃しない。

司会　今、二人二人の歴史を客観的に見ると、家庭の人間のほうがより深く入隊の動機やそれに作用した社会的要因をさぐる上で、生活を通し隊員としての過程を明らかにしてもらい、自衛隊に隊員としての過程を明らかにしてもらいたいのですが、すでにその討論のなかでできている自衛隊の実態を討論の中で、更に鮮明にしていきたいと思います。

C　僕は海上自衛隊で護衛艦に乗っていたのですが、中はすごく平和で、朝は夏六時、冬六時半起床で、飯食うことと寝たれることしかしゃべらない。一番楽なんはランプで艦長をはじめとして大〇%位の人間がやっていたらめめる間がとんでんだのじゃないかと思っぽいます。

D　船の場合は比較的狭いでしょう。僕らの航空自衛隊の場合だと一つの基地に三千人がいてそのいろんな部隊が混在しているから、一番楽なのは部隊から離隊にして分離されていたけで、航空関係の仕事としてのことがあるから、教育隊から整備部隊から航空機整備部隊からいろいろ分れていて、僕は共〇人程度の管制にいたんですが、自分の部隊以外はほとんど知らないのが実状です。

司会　自衛隊というのは何のためにあるのですか。

F　一口で言えば、われわれは自衛隊は、日本国民とか、あるいは日本の財産とか、海上とか、あるいは日本の財産とかの知識がかわらず、変化した者に対して反撃することと思っています。例えば日本の船団とか航空機が他国から或襲撃される場合には、それは国らに侵略行為であって、仮に日本人によってなされても国家以外はほとんど知らないのが実状です。

司会　自衛隊というのは何のためにあるのですか。

F　一口で言えば、われわれは自衛隊は、日本国民とか、あるいは日本の財産とかの知識がかわらず、変化した者に対して反撃することと思っています。例えば日本の船団とか航空機が他国から或襲撃される場合には、それは国らに侵略行為であって、仮に日本人によってなされても国家以外はほとんど知らないのが実状です。

C　出てきているにはきてないやつ、浜松なんかが一。陸上自衛隊の場合は必ずしも全員が脱隊部隊じゃないでしょう。後方部隊もいるし、補給もいるし、

F　補給部隊なんか、だれとるしあんなのは実戦になっても何の役にも立たないね。とにかく俺は厳しかったからね。朝、起床ラッパが鳴ったら起きなくちゃならない。遅れたら罰として食事抜きでグラウンド三〇周ほど回らなくちゃならないけど、俺はわざと遅れるんです。そういうふうにして服装つけて体力をつけていかないと自衛は体力がいちばん大切、ついていけないからね。他の奴はまじめに起床ラッパで六時に起きているらしく、俺はわざと遅れていって怒られて罰としてグラウンドを走る。他の奴らはそれを見て笑っているけど、俺のだけは考えがあってわざと走っていたんだ。

俺は前線にでも行ったら他の部分から遮断されも時、生きて行くのは自分一人の体力だけなら。その潜在上なら船が沈まず流れ木でやれ、軍艦も一つの基地がやられても何とかやって行ける基地上はそうじゃないんだ。

D　陸上っていうのは三万月位銃剣もって走り回れば一人前になるというけど海上は三年も船に乗ってないと一人前になれない。

D　航空の場合は戦争がはじまるまでで、戦争がはじまったらもう中立はない。なぜかというと、戦争がはじまるとレーダーサイトが彼奴にねらわれるからで、上官でさえそう言っているんですよ。

F　僕ら陸上は航空の補助と一緒に演習をやるけど、例えば俺らのところへ一応約三万位から落下傘降下する。砂けむりがあがる。俺ら陸地には一人の人間がいるんだ。そうすると前線司令部から「今、援護射撃と入国の第二航空団が行った」と報告がくるやつ。でもわれわれは全然援護がこない。美前の話せないから。それで前線司令部にいちいち連絡して、そこから又イロットへ連絡が行って、見えてたらどんどんやっちゃいますけど、見えないところを攻撃しているが、航空は攻撃しない。

司会　今、演習の訓練のことを少し話してもらったんですけれど、その時「敵」がいるという仮想を設定して訓練をやっていると思うけれど、それをどういう風に受けとめているのか。

F　「敵」というのは自衛隊に敵意をもっているでしょう。そいつらが敵なんであってね。敵といったら、ソビリアン、シビリアン、ロシア、北朝鮮と北朝鮮とかいろいろ思っているんだ。

D　しかし僕ら航空の場合だったら、例えば〇秒計算と間違えば一百名違うところを飛んでいる真っ白な、航空自衛隊というのは分単位でなくてはならないということがあります

サルトル編集の『人民の声』を読む映画
監督J・L・ゴダール（右は本紙特派員）

パリの光景は平和だ。だがしかし…

おどろく、すべてが公然と法の名、民主主義の名において、しかしすべてはしかたがない。人民に明らかにわかる討議をもたない。人民の眼の前で裁判ですらないというのは、いつわりである。今回のアラン・ジェスマール裁判は、新聞の語るように判決が『長びしすぎた』のではなく、それは、勝手で不公平なまちがいだ。ブルジョアジーは、法律をつくり、自らそれを破っている。

嘘ようは土曜日。マロニエの落ち葉の上を歩く人々。このガルチェラタンのカフェは人がいっぱいだ。だれもかれもが生活を楽しんでいるのだ。映画館の前は、開館一時間前、オーバーの襟を立て、恋人を抱擁しながら、長い列をつくる。人々はみな平和で穏やかな顔をしている。国際的文化都市パリは繁栄を誇っているようにみえる。十一月十二日の夜、ドゴール将軍の武声に集まった群集も満足しきっているようにみえる。このながめるパリの光景は平和だ。ただ『この光』景は、実は幻想だのだ。

『ドゴール将軍の葬儀に列席した世界の元首は八十名』これは、『光栄のヨーロッパ』を主張した彼らおそれはあるが、ひとつの時代の終わりを意味している。今もひとりの老人が政府を代表しているが、彼には、象徴されるものはない。ドゴールの死によって、レジスタンスの伝統は、保守党の側から、確実に、完全に、革新の側にとり戻すことになった。

間違って戦犯追放にならず、国葬を受けた吉田茂首相の場合は、二つの大きな偶然で政戦後の日本を指導した。一つは、日本の戦争抵抗派の統治能力の未熟さであり、もう一つは、米ソ冷戦への見通しをもたなかったことである。今も彼の後継者が、政府を代表している。

だがドゴールの場合は、ヒットラーに味方したペタン元帥のビシー共和派（政治家、経済人、文化人）を追い出し、政治の基本原則を枠づけ、ドゴールの死で、誰もが思い出したのは、第二次戦中の「レジスタンス」のことである。

多くのアフリカの首相たちが、弔辞で述べているように、彼は、一九四〇年、ナチに敗北したフランスからロンドンに渡り、「自由フランス」を組織し、ナチ・ファシズムと闘い、フランスを解放した英雄である。しかし、ここで、忘れてはならない二つの点がある。一つは、何故一九四〇年六月・七月にあるあの簡単に手を開いて、フランスは降北したのか。この問題は、現在、十五年戦争は、アメリカに、負けるまえに、中国レジスタンスに敗れ、日本の場合をあわせ考えてみることよい。

もう一つは、レジスタンスは、英雄を生みやすいが、しかしレジスタンスの開始の日付けは、他国の軍隊の占領の日付けと一致しない。すなわち、それ以前である。

イタリアでは、一九三三年十月、ムッソリーニの暗殺であり、この時、イタリーの村の神父ドンジョバンニ・マンツオーニと、社会正義の指導者ジャコモ・マチェオティが問題されている。

ドイツのレジスタンスは、いつまでもなく、一九三三年一月三〇日に始まっている。さて戦前の日本の場合は、いつ始まったのであろうか。戦後を考えてみよう。今の日本には、ひとつの政府があり、成立してから二十五年たつ。二十五年前の日本は、敗戦でちょうど、その可能性はほんのこれっぽっちもなかった。何度か、はらみ、はらもうとしたチャンスはあったが、ある時は、占領軍の間隙の中で、処理され、幾度か大きな外科手術をほどこした。すでに、戦中派はくたばれ、不死を楽しんでいる。二十五年の間、政府は、国民に飲みやすいが禁じている『ピル』（経口避妊薬）を巧妙に与え続け、慎重にも、われわれの生活、はらむ可能性を採殺しようとしている。その間に、レジスタンス派は、標美者子さんをはじめ、山崎博昭者を多くの犠牲者を出し続けているが、現在は、虚偽によっておぼれこむ堕落し合っている。みずから進んで帆けた血潮の力をもってしても、これを真っ理に引きもどすには、不十分にみえる。だが、『勇』は言う。『黙で書かれた歴史は、血で書かれた事実を踏まえとは言えない。血債は必ず同一物で決済される』

特派員報告

パリ通信第一報がとどいた。ドゴールの退陣をとして死、ポンピドーの官僚政治、新たな防法、抑圧のための「大学改革」。しかし、フランスの労働者・学生・市民の闘いを絞殺することはできない。血と炎の刻印を残すオンデーム外校では再び人占拠。全学連委員長アラン・ジェスマールの解放闘争が、現在のフランスの学生運動の輪軸である。本紙特派員は、十月十六日のサルトル自らの「人民の声」街頭販売、十月十九日の「ジェスマール解放闘争」を闘いぬくなかから、パリの報告を送ってきた。特派員は、ヨーロッパ各国の学生戦線からの本紙寄稿を獲得するために奔走していたが、予定した次号、一五〇〇号記念特集には掲載することは、依頼した活動家があいついで逮捕されるなどで、不可能になった。一五〇〇号以後の紙面でこの企画は、必ず実現することを約束したい。（編集部）

成立した破防法とサルトルの抵抗

一九六八年の五月革命のあと、フォール案にもとづき、大学は改革の努力をしているとされている。だが、「大学治安立法」と同じく、大学構内に「機動隊」を常駐させるための何初なる方法を文案化しているにすぎない。この法案は言う。「大学は、あらゆる領域にわたって、必要なエリートを提供し、各地方の社会的経済的発展に参加することにより、国家の要請にこたえなければならない。この使命にあたり、国学は簡素、技術革新の要請する民主的運営に従わなければならない。」このような大学の合理化、今までの大学の使命をくり返し、権力が大学を操作することを意図にすることを目的としているだけである。

この六月に成立した、フランス破防法は、集会・結社・表現の自由に対して、強権によって、思服させようとしている。これに対して、もっとも力強く闘争をくり返しているのが、旧『プロレタリア左派』のグループである。ご存知の通り、この組織は、すでに三年ほかり前から活動しており、機関紙『人民戦線』を発行してきたのだが、再三にわたり発行停止処分となり、当局は今年にはいってから、この組織のメンバーの一部を検挙するにいたった。二人の機関紙編集責任者もあいついで、逮捕され、起訴された。四月には、J・P・サルトル氏が責任を引きうけ、二十号から三十号までを担当しているが、ポンピドーは彼を逮捕することができないでいる。五月革命のリーダーの一人、アラン・ジュスマールは、逮捕されての十月の末に二八カ月の刑を言い渡されたが、一人だけが逮捕されたのは、ジェスマールは八分間話しをしたが、一時間半にわたり、ポンピドーの『大学改革』の『ファシスト』を糾弾した。……裁判官は彼が述べたことを、大学の要求に答えるためであった。ただ二人の同じ『七～八人』も同じことであるが、の言葉によって、五千人のデモを街路に繰り出すことができるとどうして信じられようか。また、検事は、明白として、誰が一体、そんなことを信じるのか？起訴しなければならない。支払いがおくれればおくれるほど、利息は増えねばならない」

仏全学連委員長
アラン・ジェスマール

サルトル氏は、その裁判の公判記事の序文の中で言う。

「ジェスマールの刑の理由とされている会合は『人民戦線』の前編集委員一人の弁護に抵抗するために行なわれた。この会合は初めから五千人にのぼる参加者は、『十七日街頭に』と叫んだ。数人の弁護士は、興奮している群集の前で話をし、ほとんど、彼ら参加者全員と同じ考えであることを示した。だが、一人だけが逮捕された。ジェスマールは八分間話しをした。……裁判官は彼が述べたことを、大学の要求に答えるためであった。ただ二人の同じ『七～八人』も同じことであるが、の言葉によって、五千人のデモを街路に繰り出すことができるとどうして信じられようか。また、検事は、明白として、誰が一体、そんなことを信じるのか？起訴しなければならない。支払いがおくれればおくれるほど、利息は増えねばならない」

甦るレジスタンスの歴史

ドゴールの死とパリの平和

事実は、それはそのままではない。それは、ジェスマールが解散させられた旧『プレタリア左派』の指導者と目されたからだ。マルセルセルランは、この彼を解散させた時、大きな矣をしでかした。すなわち、彼は『自分はこの党を解散させる。というのは、この党員達は、党を再建しようと意図するであろうし、その時が政府彼らを攻撃しえるであろうから』と本気で言ったのだ。乗するのは、それは、プレタリア左派の旧スパ人全員は、以前から罪があり、彼ら参加者は、『ひどい』と言ったのだ。

ロレタリア左派の旧スパ人全員は、以前から罪があり、彼ら参加者は、『ひどい』と言ったのだ。

ことは、最近、旧・P・のメンバーに六月の判決下されたことが示しているように。彼は、カバンの中に機関紙一部を持っているのを見つけられただけ、党を再建しようとしているという理由であった。その同じ理由で、ジェスマールは、以前から罪があるのである。十八カ月きっかりの。

彼はそれを知っていた。彼は、証なしの、また証拠なしの告訴ということの要求裁判を予知していた。そして、目下、彼は警視庁法延長で彼に課すであろう『ぴひい』処罰を、その同じ矣で待っている。御承知の通り、プルジョワ的保証というのは、彼の場合存在しないのである。すなわち、すべては初めからもうきまれたものであり、彼に罪があることをあらためて証明してみせる必要などないのである。それは、前もって決められていたのであるから。

政府は、新しい第二法をつくる必要さえないのである。すなわち、政府は法在の法律を自分の意のままに、粗末にゆがめさえしたらず分なのである。判決記録は、この問題について多くの教訓を含んでいる。プルジョワジーは、自分達の反対者にイデオロギーもなければ、道義もないのである。プルジョワジーは、法律一点ばり主義によって自分達を擁護しているのである。（彼防法というような鎮圧法に投票させることにより）……」

サルトルの説明で、ジェスマール裁判の矣要はおわかりいただけたと思う。サルトルは、続けて彼の『自由』についての哲学を語り、これからの闘争の展望を決べく、『われわれの闘いは、政府や支配階級をして、現今の法律をゆがめずに用いるようにさせなければならないということである。』

ロレタリア左派の旧スパ人全員は、以前から罪があり、彼ら参加者は、『ひどい』と言ったのだ。

ことは、最近、旧・P・のメンバーに六月の判決下されたことが示しているように。彼は、カバンの中に機関紙一部を持っているのを見つけられただけ、党を再建しようとしているという理由であった。その同じ理由で、ジェスマールは、以前から罪があるのである。十八カ月きっかりの。

彼はそれを知っていた。彼は、証なしの、また証拠なしの告訴ということの要求裁判を予知していた。そして、目下、彼は警視庁法延長で彼に課すであろう『ぴひい』処罰を、その同じ矣で待っている。御承知の通り、プルジョワ的保証というのは、彼の場合存在しないのである。すなわち、すべては初めからもうきまれたものであり、彼に罪があることをあらためて証明してみせる必要などないのである。それは、前もって決められていたのであるから。

政府は、新しい第二法をつくる必要さえないのである。すなわち、政府は法在の法律を自分の意のままに、粗末にゆがめさえしたらず分なのである。判決記録は、この問題について多くの教訓を含んでいる。プルジョワジーは、自分達の反対者にイデオロギーもなければ、道義もないのである。プルジョワジーは、法律一点ばり主義によって自分達を擁護しているのである。（彼防法というような鎮圧法に投票させることにより）……」

サルトルの説明で、ジェスマール裁判の矣要はおわかりいただけたと思う。サルトルは、続けて彼の『自由』についての哲学を語り、これからの闘争の展望を決べく、『われわれの闘いは、政府や支配階級をして、現今の法律をゆがめずに用いるようにさせなければならないということである。』

……もし圧力が法律を矣るならば、革命運動を抑圧する手段をもたいが、（カルチェラタンの渋ん中）で、レジスタンスの作家ブェルゴー（『海の矣然』ほか）などの呼びかけで、ジェスマール解放の集会が三千人以上の聴衆を集めて行なわれた。その後から連日、ゲリラデモをくり返した。フランスの各大都市全部にわたり行なわれた。パリだけは五百人近い逮捕者を出した。フランスは、日本と違って、デモ隊の場で解散されれば、いとい、という最低の立場で護送車（サツがのこという）に積まれ、パンツ姿にされます。朝一番の地ゴ鉄発車には、九十九名、返されるというのが、通常のデモである。また、今回はサルトルは特別弁護人として裁判所に出席しないで、ルノー自動車工場の入口前の空ドラムカンの上で、マイク片手に労働者に喜演語りかけた。彼の

「ジェスマール・レジスタンス」の壁書き

中にこそ、真の戦闘的自由の精神が生きていることを見る。すなわち、レジスタンスの精神。なぜなら、真の自由とは、違った考えを認めることから出発し、たとえ立場が違っても、その違った考えの相手が権力の強圧にあっている時、身をもって助けるということであるから。

十年前、アルジェリア戦争の時、『裏切り』と呼んで非難し、多くの左翼は正当な弁護をこめられたこのシャンソン機関」を、彼は全国的に支持した。こんにち、これまで、「極左毛沢東の手先」、「左翼のはねあがり」といわれているジェスマールたちを積極的に弁護している。だが、この十年は彼から多くの仲間が去ってゆき、十年前から残っているのは、彼の最大の友ポンピールだけのようにみえる。しかし、十年の時間は、彼の真の新しい友をもつくった。ゴダール監督はその一人である。この十一月六日、機関紙三十号発行にわたって、サルトルは編集長として前日記者会見し、官憲に挑戦した。当日、また印刷中のところを訪ねたら、偶然にも、ゴダール監督が、印刷工と一緒に、数時間にわたり立ったまま新聞を折り数を数えているのに出会い、話す機会をえた。彼はその日、官憲のふみ込むのを計算して、『すいぶんくたびれ、ほこりぶたに着を着て手伝っていたが、官憲の肩すかしで、こちらも当のサルトル氏は、その場にあらわれず、肩すかしをくらわせて、三十号発行の成功をかちとった。

今週から大学は始まり、パリ大学の学生運動のメッカ、ナンテール校は、レストラン占拠に続き、運動は活発化している。彼らは、ある外国の立場のエージェントではない。彼らは、彼ら自身のため、彼らの未来のために運動している。彼らは、フランスに真のデモクラシーを築くために運動しているのである。彼らは、孤立してもないし、日本において増加する協力、積極的、消極的同盟をうけている。彼らは、前掲で述べ、その運動は六八年以後の比較深味の左翼を覚醒させつつある。（第一便おわり）

思想の自由な流布を

M．ジュワイエ

フランス・アナキスト連合

訳・大塚雅也

五月革命によって胎動をはじめたフランスの革命的プロレタリアート、学生の闘争に対して、政府は、仏共産党など既成左翼の暗黙の了解のもとに、極左団体の解散・機関紙の発禁を含む『暴力分子の取り締まり』政令を発した。その法的根拠は、1936年の反ファッショ人民戦線内閣による極右団体解散令であるという。

もちろん、歴史の皮肉に苦笑していてはどうしようもないことは、右の『パリ通信』を見ても分ることだ。ここに訳出した文献は、フランス・アナキスト連合機関紙『ル・モンド・リベルテール』第163号（1970、7～8月号）に掲載されたものであり、アナキストの『政令』に対する抗議の表明である。

アナキストに対する原則的な批判はここでは留めるとして、この文献を通じて、彼らのブルジョア政府に対する姿勢、スターリニズム、社会主義国家に対する態度をうかがうことは可能であろうし、批判すべき点、克服すべき傾向も確認しうるであろう。（編集部）

思想の生命を奪うためには人を殺し続けるしかない

（毎）日、新聞を読んでいるとわれわれは、発禁の新聞を配布していた青年が逮捕され、禁錮刑（しばしば隔離房）入りという恐ろしいことが、『他国』では、日常的に行なわれている。

そのうちに、たとえこの一種の集団的な無関心が自分の無罪を証明しなくてもいいその一種の無関心が、現代社会を構成している不調和な社会的諸グループが自由にしている報道手段のすべてによって、良好な態度にある出版を自覚めさせるのに十分であったとはあるまい